

さかのぼること約10年、当時のスマートシティはエネルギーを中心とした新しいまちづくりの可能性を切り開いたといえる。これはスマートシティの第1世代といえよう。その後、サービスやデータ連携、対象とする分野の拡大など、さまざまな追加要素を兼ね合わせ、現在、広く認識されているスマート

# 需要起点のスマートシティ

## 賢い都市・地域戦略(2)

第2世代のスマートシティの姿に至るのである。これは第2世代といえる。もちろん、従来のエネルギーに関する取り組みは

依然として重要であるが、それ以上に一人一人のQOL(生活の質)の向上に期待がかかっているといつてよい。

スーパーシティ構想だろう。また同時に「スマートシティ対応への遅れ」「周回遅れでは」という声も拳がり始めたように感じている。結果的に申し上げるならば、「全く遅れていない」と言い切れる。

理由の一つは、前回お伝えしたように、依然として

宮田 将門(みやたまさと) 政策研究事業本部研究開発第2部(名古屋) 主任研究員



「モグラたたき」状態であり、時代とともに穴の数が増える一方である。もちろん、そのような問題・課題の取り組みは必要ではあるが、スマートシティにおいては、むしろ問題・課題を踏まえた「需要」を捉え、これに 대응することが最も重要である。非常にシンプルな例を挙げよう。「ショッピングモールの駐車場から出るだけに混雑のため20〜30分もかかる。とにかく早く脱出したい」「休日の中心街を訪れたら駐車場の空きがない。混雑が分かっていたら公共交通で来たのに、状況を知術がない。予測でも良いので可能性を教えて欲しい」。このような需要は、あらゆる場面でまだまだ存在する。日常のふとした需要の取り込みを丹念に行い、それを克服し続けるまちこそ、市民に支持されるスマートシティとなるだろう。

(毎週木曜日に掲載)

